

## 米国研究製薬工業協会(PhRMA)

東京大学、日本製薬工業協会、欧州製薬団体連合会(EFPIA)とともに

“グローバル時代の創薬オープン・イノベーション”をテーマに

「ヤング・サイエンティスト・シンポジウム 2013」を開催

…創薬に携わる日本の若手研究者育成の一環として…

日時: 2013年8月31日(土)午後1:00~5:30

会場: 東京大学本郷キャンパス「伊藤謝恩ホール」(伊藤国際学術研究センターB2F)

PhRMAは、東京大学、並びに日本製薬工業協会、欧州製薬団体連合会(EFPIA)との共催により、独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)の後援を受けて、去る2013年8月31日、東京大学本郷キャンパス「伊藤謝恩ホール」において、ライフサイエンスにおける若手基礎研究者を対象に、「ヤング・サイエンティスト・シンポジウム 2013」と題した研究会を開催しました。

同シンポジウムは、創薬分野で若手研究者が果たすべき役割の重要性に関して、グローバルな視点から再認識することを研究者たちに促すこと、研究意欲のさらなる向上、創薬分野で世界的に活躍できる人材の育成に繋ぐことを目的として実施したものです。

シンポジウムの前半では、創薬分野における豊富な経験と知見を有する産・官・学それぞれの専門家から、若手基礎研究者に向けた期待と希望を伝える講演を行いました。

はじめに、基調講演として東京大学大学院医学系研究科 分子細胞生物学専攻 化学・分子生物学講座 細胞情報学分野教授の間野博行氏が「がん創薬研究における標的特定の重要性」を講演しました。これを受けて産業界からは、武田ファーマシューティカルズ・インターナショナル Inc. 疾病領域グループ統括部門長ジェイミー・ダナンバーグ氏が「次世代の産官学連携によるイノベーションのさらなる加速化」について講演し、行政の立場からは、独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA) 審査センター長の矢守隆夫氏が「アカデミアからの日本発医薬品創出へ向けて:承認審査を見据えて」をテーマに講演し、教育機関の立場からは、東京大学大学院医学系研究科 脳神経医学専攻 基礎神経医学講座 神経病理学教授の岩坪威氏が「アルツハイマー病:分子病態から根本治療・予防をめざして」をテーマに講演しました。

後半のパネルディスカッションでは、医師主導治験経験者の名古屋大学大学院医学系研究科 神経内科准教授の勝野雅央氏と、国立病院機構京都医療センター 小児科医長の河田興氏の若手研究者2名が大方の若手研究者を代弁するかたちで新薬開発に係る問題提起を行い、それに対して山梨大学医学部特任教授(臨床研究開発学)の岩崎甫氏と独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA) 薬事戦略相談室長の宇山佳明氏がモデレーターとなり、前半に講演した4名の講師を加えて、異なる世代・立場の間で、これからの創薬オープン・イノベーションの進むべき道について議論が展開されました。

ディスカッションでは、二人の若手研究者による医師主導治験現場でのリアルな体験発表を主な事例に、今後の創薬開発に向けて解決すべき課題や、アカデミア、臨床医師、監督官庁、製薬会社がそれぞれどのような役割を担うべきかについて議論が白熱しました。

本シンポジウムでは196名の方々が聴講し、参加者からは「医師主導治験のリアリティーが垣間見られて興味深かった」「医学と薬学や他の基礎研究分野との連携が重要なことを再認識した」「今後は医療現場、治験現場、企業の創薬研究現場の問題点を取り上げて、共有できる場になるといいと思う」などのコメントがありました。

最後は、アルフォンゾ・G・ズルエッタ PhRMA 在日執行委員会委員長による「本日のシンポジウムでの議論が、参加された創薬に関わる方々にとって、有益な経験となることを切望する」というスピーチで締めくくられました。

【シンポジウム模様】

間野博行氏



ジェイミー・ダナンバーグ氏



矢守隆夫氏



岩坪威氏



<パネルディスカッション風景>

岩崎甫氏



宇山佳明氏



勝野雅央氏



河田興氏



全体の風景



アルフォンゾ・G・ズルエッタ  
PhRMA 在日執行委員会委員長

